

規格

規格は利用統計の解読に役立つ (William Hoffman)

Standards: Standards help decode usage statistics, by William Hoffman.

Research Information, December 2006 / January 2007.

<<http://www.researchinformation.info/ridec06jan07standards.html>>

新しい SUSHI プロトコルは、オンラインジャーナルの利用に関する統計を報告し、分析する標準的な方法である。Swets の William Hoffman は、これが図書館員の作業をいかに単純にするかを説明する。

この1年以上にわたって、私たちの業界を漂っている話題の言葉の一つは SUSHI である。これは、お米やのりや刺身がきれいに盛りつけられた皿のおいしいイメージを呼び起こすかもしれないが、それは、またもっと専門的な意味を持っている。

標準化された利用統計ハーベスティング・イニシアティブ (SUSHI: Standardized Usage Statistics Harvesting Initiative) ¹⁾は、名前を共有している日本の食べ物ほどには味蕾を引きつけないが、この全国情報規格機構 (NISO: National Information Standards Organization) イニシアティブは、本業界では大変重要なことである。それは図書館員がオンラインコンテンツの利用をどうしたら追跡できるかという課題を解決することを目的としている。

単独の雑誌の利用統計を取り出すことは比較的容易であるが、図書館にとって出版社のウェブサイトを渡り歩かなければならないとすれば、特に関わる雑誌の量を考えると、きわめて多大な時間を要することが明らかになる。もちろん、単に統計を取り出すのはこのプロセスのまさに一部である。図書館員はそのような統計を評価する必要があり、これは大きな問題を引き起こすことになる。

場合によっては、出版社から取り出された統計は、標準的 COUNTER²⁾フォーマットで提示されるだろうが、データが出版社独自の内部フォーマットでコード化されていることがある。たまにはデータがウェブページのみで利用でき、ダウンロードが不可能で印刷しかできないことがある。多様なフォーマットの統計を持つことは、全体としてそれらの統計の評価作業を信じられないほど複雑にする。

SHUSI は何をするか

SUSHI の出番だ。それは図書館が利用統計を自動的に取り出し、分析できるようにするプロトコルを提供することを目的としている。試行利用のための SUSHI の規格草案は 2006 年 9 月 20 日に公表され、草案の PDF 版が NISO SUSHI 委員会のウェブサイトからダウンロードできる。初期設定により、このプロトコルは出版社が標準フォー

マット (COUNTER XML) で利用統計を提供することを強制している。SUSHI プロトコルはそれで COUNTER レポートの XML バージョンのためのシンプル・オブジェクト・アクセス・プロトコル (SOAP: Simple Object Access Protocol) の質問・回答ウェブサービスの「カバー (wrapper)」である。

本プロトコルでは、図書館のクライアント・サービスで処理が開始される。これは、内部で開発したアプリケーションであったり、利用データ統合サービスの一部として実行されたり、統合図書館システム (ILS: integrated library system) ・電子情報資源管理 (ERM: electronic resource management) システムであったりする。クライアント・サービスはそれ自身とデータ・プロバイダが実行する SUSHI サーバ・サービスに統計を要求するカスタムとを識別する。また、要求される統計の種類を識別する。それに応えて、サーバは要求者とカスタム情報とともに XML フォーマットの統計を提供するか、しかるべきエラーメッセージを返す。

SUSHI の開発者は、図書館と取引があるすべての COUNTER 準拠ベンダーに対して、クライアント・システムが月に一度、自動でレポートを取り出すようにプログラムを組む水準に達することを目的としている。本年初めの NISO と COUNTER の覚え書き (MOU) への署名に続いて、NISO SUSHI 作業グループが現在、COUNTER スキーマの維持管理に責任を持っている。このスキーマは、送付される XML ファイルの内部構造を記述する。そのスキーマには、利用者が到着ファイルの構造に関する知識と一緒にアプリケーションを予想し、構築できるものが含まれている。

さらに、SUSHI プロトコルは、当初 COUNTER 準拠レポートを処理するために開発されたが、時間が経てば COUNTER 以外のレポートの送付メカニズムに進化し、これが容易にできるような方式で設計された。取引相手に求められるのはフォーマットを合致させ、レポート名称を NISO に登録するだけである。

図書館にとっての便益

SUSHI の基本的な便益は、それが退屈で繰り返しの多い処理を自動化することである。SUSHI は図書館員にとってきわめて多大な時間節約の手段となろう。図書館員が、出版社ごとに利用統計を取り出すのに時間を費やす必要や多数のさまざまなフォーマットへの心配がまったくなくなるという事実は彼らにとって最適だろう。出版社にとって、SUSHI は利用統計を共通フォーマットにするのみならず、その情報の送付についても標準化を可能とするツールである。

SUSHI が広範囲に採用される限りは、そのプロトコルは標準ウェブサービスや広範に採用された COUNTER レポートを利用するのでこれを邪魔する重要な障害があると思えない。私たちは図書館で ERM 製品が急速に普及しているのを既に見ている。SUSHI は、図書館で電子情報資源の管理がずっと容易になるという ERM の約束の中心の一つである。SUSHI に対応した ERM システムに投資した図書館は準拠のために何もする必

要がない。

既に本規格への対応を追加した ERM ベンダーとともに、図書館は出版社にその実装を強く要求するように思われる。独自のソリューションを展開しつつある出版社や図書館は、NISO SUSHI 委員会のウェブサイトで Java や NET 環境用のツールキットと並んで SUSHI スキーマを見つけることができる。そして、出版社にまだそれを実装する機会がない場合、図書館は同様の情報を入手するために SUSHI 準拠のアグリゲータを探すことができる。

Swets³⁾は SUSHI イニシアティブの創設メンバーの一員である。仲介業者として、Swets は、顧客が情報資源を簡便で合理的な方式で管理するために役立つ方法を絶えず探している。私たちの処理プロセスの効率を上げることはそれを提供する鍵であり、それだけに私たちは SwetsWise Online Content⁴⁾サービスに SUSHI 対応を追加し、カスタマにこの素晴らしい規格を利用するように勧めている。結局、SUSHI は関連するものすべてに対して、利用統計の送付や処理や評価を適正で単純で透明なプロセスで行うのに役立つはずである。それを食べようとしてはいけない！

William Hoffman は Swets 情報サービスの工程アナリストであり、SUSHI 委員会のメンバーである。

より詳細な情報

[1] NISO SUSHI 委員会のウェブサイト

http://www.niso.org/committees/SUSHI/SUSHI_comm.html

[2] 試行利用のための SUSHI 規格草案

http://www.niso.org/standards/resources/Z39-93_DSFTU.pdf

訳注

1) SUSHI の技術仕様については以下のプレゼンテーションが詳しい。

2006-September-28, SUSHI at Work, Part 2: The Technology, presented by Oliver Pesch at NISO workshop on Managing Electronic Collections, Denver, CO

<<http://www.niso.org/presentations/MEC06-10-Pesch.pdf>>

2) COUNTER のウェブサイト

<<http://projectcounter.org/>>

3) Swets Information Services のウェブサイト

<<http://informationservices.swets.com/>>

4) SwetsWise Online Content

SwetsWise online content は、雑誌の目次や抄録に加え、大容量で幅広いフルテキストデータへのシングルポイントアクセスを提供するサービス

<<http://informationservices.swets.com/web/show/id=40029>>